第38回国民文化祭　第23回全国障害者芸術・文化祭
いしかわ百万石文化祭2023
七尾市地域文化発信事業　令和5年度秋季企画展

能登畠山氏とゆかりの文化

会　期：令和5年9月23日(土・祝)～10月29日(日)
休館日：毎週月曜日(10/9は開館)、10/10(火)
会　場：石川県七尾美術館 七尾市小丸山台1-1

観覧料＝一般500円(400円)、大学生350円(300円)、高校生以下無料
※(　)は20名以上の団体料金
※「国民の祝日」は70歳以上の方団体料金
※10/15(日)「いしかわ文化の日」は石川県内居住者の方無料
※障がい者手帳をお持ちの方と、付き添いの方1名様まで無料（ミライロIDも可）

主催＝文化庁、厚生労働省、石川県、石川県教育委員会、七尾市、七尾市教育委員会
いしかわ百万石文化祭2023実行委員会、いしかわ百万石文化祭2023七尾市実行委員会
石川県七尾美術館[公益財団法人七尾美術財団]

能登畠山氏（のとはたけやまし）とは

畠山氏は鎌倉時代初期、足利家当主義兼の子義純を始祖とする足利氏一門。そのため室町幕府内においては、常に政権の中枢にあって代々管領をつとめた名門であった。能登畠山氏は同氏の庶流にあたり、室町時代中期より戦国時代末期までの約170年間にわたって能登国を統治した。

畠山氏と能登とのかかわりは嘉慶2年（1398）頃、畠山基国が能登守護に任ぜられたのが始まりといわれる。応永15年（1408）に基国の子満慶（1371～1432）が守護を継承、満慶を初代として能登畠山氏が成立した。なお、満慶の官位が「修理大夫」であったことから、同氏は代々その唐官名をもって「畠山匠作（修理大夫）家」とも称された。

当時の守護大名は京都在住が基本であり、満慶も幕府重臣として将軍に近侍している。これは第二代当主の義忠（？～1463）も同様で、実際に能登在地での統治を行ったのは応仁元年（1467）の「応仁・文明の乱」後、第三代義統（？～1497）からという。

義統死後、いったんはその嫡男義元（？～1516）が第四代当主に就任する。ところがそれに反発する一派が義元を追放、義統の二男慶致（？～1525）を第五代当主にすえた。しかし永正3年（1506）に領内で大規模な一向一揆が勃発すると、同勢力への危機感から義元・慶致両派が和睦。結果義元が再び家督を継承して第六代目となった。なお能登畠山氏の居城で「領国統治のシンボル」というべき七尾城は、おおよそこの頃までには築かれていたらしい。

義元の死後に第七代当主となったのが、慶致の子である義総（1491～1545）だ。義総は約30年にわたって当主の座にあり、卓越した政治手腕により領内を安定させて能登畠山氏の全盛期を築く。あわせて七尾の城下町も整備され、大いに繁栄したと伝わる。また義総は文芸にも深い関心をよせ、城内では盛んに文芸活動が行われたという。

義総の死後、その子義続（？～1590）が第八代目を継ぐが、この頃より重臣たちが次第に台頭。一族・家臣間の権力争いが頻発してたびたび内乱にまで発展、大名の権威は失墜した。その状況を打開し権力回復と領国再建をめざす第九代義綱（？～1593）は、起死回生を図って諸政策を断行。しかしそれに反発する重臣共謀のクーデターにより、能登から追放されてしまう。

その後重臣たちによって擁立された第十代義慶（？～1574）はすでに傀儡と化し、領内はいっそう混迷の度を深めてゆく。さらに義慶も変死（重臣による暗殺とも）し、その混乱は越後の大名・上杉謙信の侵攻を招くことに。騒然とした中で義慶の弟義隆、続いて義隆の嫡男春王丸が家督を継いだともいわれるが、その命運はもはや「風前の灯」だった。そして天正5年（1577）、七尾城はついに陥落。ここに能登畠山氏は滅亡した。

テーマ1
「能登畠山氏の歴史と文化」

「賦何船連歌」　文明15年（1483）　七尾市蔵
「賦何路連歌」　大永3年（1523）　東京都・明治大学図書館蔵
「賦何人連歌」　大永5年（1525）　個人蔵

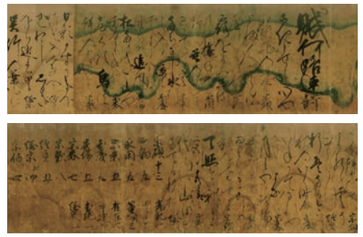
「連歌」とは「短歌」から派生して誕生した詩の一形態。短歌の「上の句」と「下の句」を、それぞれ複数の別人が交互に詠む形式を採る。室町時代頃からは「百韻」と呼ばれる「百句で一作品」が基本形となり、公家のみならず上級武士の間でも流行した。さらに応仁元年（1467）の「応仁・文明の乱」以降は地方への文化伝播に伴って、連歌は地方の大名たちにもたしなまれるようになってゆく。

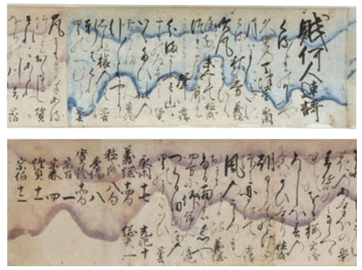
文芸活動を重視した能登畠山氏も、連歌の会を盛んに挙行したようだ。その一端を示すのが本「連歌百韻」3巻である。内訳は「賦何船連歌」が文明15年（1483）11月2日、第三代義統の時代。そして「賦何路連歌」および「賦何人連歌」は大永3年（1523）9月21日と同5年（1525）7月28日で、第七代義総の時代となる。3巻とも打雲の料紙に優美な文字がびっしりと書され、典雅な風情に満ちあふれている。

「賦何船連歌」は義統自身が発句（最初の歌）を詠み、京都から招かれた文化人や能登畠山氏家臣たち14名が連なる。また「賦何路連歌」は発句が連歌師として著名な月村斎宗碩（1474～1533）。義総は参加していないが、文化人や能登畠山氏家臣たち18名が連衆をつとめる。そして「賦何人連歌」では義総が参加、発句は「能登永閑」とも称された連歌師の小幡永閑（生没年不詳）でこれに義総が続く。連衆は11名で、注目すべきは義総が14句も詠んでいること。ここからも義総の文芸への「愛好ぶり」が窺えよう。

本3巻は「能登畠山文化」の象徴的存在であり、その栄華を現在に伝える資料として極めて貴重である。なおいずれも現在は巻子仕立てだが、かつては料紙4枚を折り紙としていた。

「賦何船連歌」（上：巻頭部、下：巻末部）　七尾市蔵

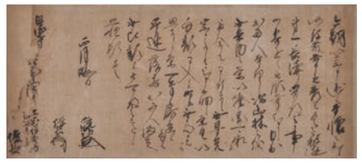

「賦何路連歌」（上：巻頭部、下：巻末部）
東京都・明治大学図書館蔵


「賦何人連歌」（上：巻頭部、下：巻末部）　個人蔵

「能登畠山氏奉行人連署書状」　永正12年（1515）頃　七尾市・龍門寺蔵

永正12年（1515）頃の正月に第六代当主義元の奉行人・隠岐統朝と三宅俊長が、鳳至郡大屋荘三井（現・輪島市三井）の興徳寺に宛てた書状。同寺の要請により、三井中村の買得地を能登畠山氏の寄進扱いにすることなどが記される。また興徳寺が両奉行人に、能登における「無導光宗」（一向衆）の動向を伝えていることが注目点。当時勢力を拡大しつつあった一向宗に対して、義元が注視していた様子が窺えよう。

なお興徳寺は義元により建立された曹洞宗寺院。能登畠山氏の外護を受けていたが、16世紀末頃の同氏滅亡とともに荒廃した。その什物や文書などは龍門寺（七尾市）に移管されて現在に至っている。



「畠山義総（悳胤）書状」9通　石川県立歴史博物館蔵
「畠山義総書状」2通（山科家・冷泉家宛）　七尾市蔵

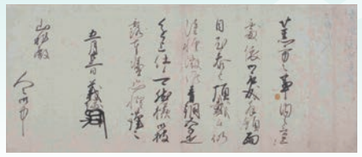
「文武両道に秀でた名将」と謳われる能登畠山氏第七代当主・義総。周辺諸勢力と巧みな外交を展開して領国を安定させる一方、内政にも優れた手腕を遺憾なく発揮して能登畠山氏の全盛期を築いた。

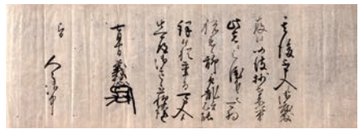
一方で文芸を深く愛好した義総は、当時の古典研究の第一人者である三条西実隆（1455～1573）に師事。『源氏物語』や『伊勢物語』などの研究に勤しんだ。その学識たるや、実隆より「古今伝授」を受けるほどであったという。

かつて七尾城内には、彼の蔵書が「長持三万棹」以上も収められていたと伝わる。文芸への「傾倒ぶり」を象徴するエピソードだが、本文書類をとおしてもそのことが窺える。

今回出品されている義総の文芸に関する文書は、石川県立歴史博物館本が9通と七尾市本が2通の計11通。歴史博物館本は「義総」名義が4通と「悳胤」（義総の隠居名・義総は天文5年に出家し悳胤と号した）名義が5通で、七尾市本はいずれも「義総」名義からなる。

その内容は三条西実隆などとのやり取りで、『源氏物語』の講釈に関することや『伊勢物語』の借用に関することなどだ。また七尾市本の方には「薫方之事」とあり、これは香道における「お香の調合マニュアル」ではないかという。義総の文芸に対する関心の幅広さを表しているといえよう。


「畠山義総書状」（山科家宛）（享禄3年）　七尾市蔵

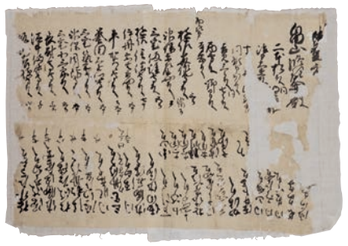

「畠山義総書状」（天文2年）　石川県立歴史博物館蔵

「畠山悳胤書状」（天文6年）　石川県立歴史博物館蔵

「気多社檀那衆交名」　天正元年（1573）　羽咋市・気多大社蔵

永禄9年（1565）、能登畠山氏重臣たちによるクーデターが勃発。第九代当主畠山義綱とその父義続（悳祐）が能登から追放されてしまう。その後重臣たちによって第十代当主に擁立されたのが義慶である。

本状は天正元年（1573）に義慶ら畠山氏一族と家臣が一宮気多社（気多大社）の摂社である若宮・白山両社の遷宮を慶び、「領国の安泰」を神前に誓ったことを記したもの。最初に「能登衆」として当主義慶の名と義清など畠山一門、続いて「面々次第」として遊佐続光や三宅長盛ら重臣や家臣たちの名が列挙される。なお名前の下に記された数字は、遷宮慶賀のための初穂料の額（単位は疋）。

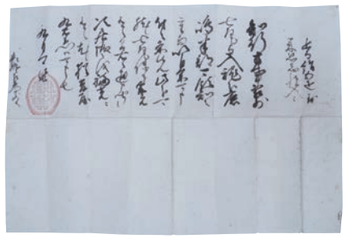


「織田信長朱印状」　天正8年（1580）　個人蔵

天正5年（1577）9月、上杉謙信の攻勢により七尾城は陥落し能登畠山氏は滅亡する。その際に反上杉派であった長続連ら長氏一党はほとんどが討ち取られ、一族は存亡の危機に陥ってしまった。

その後長氏の復活と一族の復讐を悲願として孤軍奮闘したのが、数少ない一族の生き残りであった長連龍だ。連龍は当時北陸に勢力を拡大してきた織田信長に臣従。能登各地で上杉や畠山氏旧臣らと激闘を繰り広げた。

やがて上杉勢力は一掃され、能登は織田の領国に加わる。信長は連龍の働きを評価し、天正8年（1580）鹿島半郡（現在の七尾市田鶴浜および中島と中能登町の一部）を知行地として与えた。本状はその折の宛行状である。



「黒韋肩紅白糸威腹巻 古制背板付 長家伝来」　室町時代（14世紀）　石川県立歴史博物館蔵

腹巻は甲冑の一形式で、背中から体を入れて引き合わせるものをいう。古くは下級武士用の甲冑だったが、室町～戦国時代には上級武士も着用するのが一般的になった。

本作は室町時代前期独特の古様な形式を保つ貴重な作例である。背板にも特徴があり、後年に見られる背面の防御用ではなく、大袖を使用するために必要な大座鐶を取り付けたものとなっている。

能登畠山氏重臣のひとりであり、後には加賀八家ともなった長家に伝来した唯一の腹巻として貴重な資料である。

「脇指　銘能州笠師／国長作」能州笠師国長　南北朝～室町時代（14世紀）　個人蔵

脇指は一般的な刀よりも短い刀剣で、打刀とともに脇に指し、本差が破損したときの予備的な役割を果たした。本作は長さ36.6センチ、反り0.6センチ、平造、庵棟、鍛え板目、刃文のたれに互の目交じりの脇指。

作者の国長は、能州笠師（現・七尾市中島町）に住んでいた刀鍛冶で、応永年間（1394～1428）頃に活躍したとされるが、伝歴には不明な点も多い。なお、この時期は能登畠山氏の初代当主である満慶の治世と重なっており、その点でも注目される。

「山王二十一社神楽鈴」蓬莱國近　永正13年（1516）　七尾市・大地主神社蔵

神楽鈴は神楽を舞う際に用いられる鈴。本作では直径約2センチの小さな鈴が10個つなぎ合わされており、鉄製挿柄の銘文により永正13年に奉納されたと判明する。奉納後に火災に遭ったようで黒く変色しているが、鍍金の跡が部分的に確認できる。

作者は能登畠山氏に仕えたとされる鍛冶師・蓬莱國近。近世の史料によると、國近は駿河国（現・静岡県）に生まれ、第三代当主義統の時に能登に下り、第七代義総の治世まで活躍したらしい。当初は刀鍛冶であったが、兜や面頬を制作する春田鍛冶に転職したという。

「大念寺屋敷出土遺物」　室町時代（15～16世紀）　個人蔵

大念寺屋敷は七尾城の麓に形成された城下町の寺院比定地で、第三代当主義統の菩提寺である大寧寺と考えられている。

水晶製五輪形舎利容器と天目茶碗は昭和28年（1953）、木落川からの導水溝掘削工事の際に人骨などとともに発見されたもの。いずれも大寧寺にかかわる遺物とされ、「能登畠山文化」の水準の高さを窺うことができる資料として重要といえよう。

「熊来左近将監画像」　伝長谷川信春（等伯）　室町時代（16世紀）　七尾市・定林寺蔵

熊来左近将監は本図の所蔵先・定林寺を創建したとされる武士で、能登国熊来荘（現・七尾市中島町）の地頭を務めたという。明徳2年（1391）に勃発した「明徳の乱」の際には能登国守護・畠山基国の軍に参加し、戦死したとされる。

面貌表現は剥落が激しく判然としないが、下描き線などから鋭い眼光を窺うことができる。なお、素襖をまといながら烏帽子を着けない形式で描かれる点が室町時代の肖像画に多くみられることに着目し、像主を第九代当主義綱の近臣・熊来続兼（生没年不詳）とする説もある。

落款や印章はないが、像主横の太刀の描法などが「伝名和長年像」（東京国立博物館蔵）など長谷川等伯筆の肖像画に近似することから、等伯若年期制作の1点と考えられている。

「畠山義親画像」　延宝8年（1680）　能登町・萬福寺蔵

畠山義親は能登畠山家第九代当主義綱の三男といわれ、能登畠山家庶流の松波畠山氏の第六代当主となった人物。文武に秀でたとされ、天正5年（1577）の七尾城での籠城戦の際も城内にて奮戦する。七尾落城後は松波城に籠り徹底抗戦を貫くも、武運つたなく戦死したと伝わる。

表褙墨書によると、本図は義親自身が生前に自らの姿を描かせた肖像画の模写で、原本は享保11年（1726）に焼失した。義親の曾孫・知義が延宝8年（1680）に萬福寺に参詣した際に原本を模写していたため、当時の住職に請われて知義の孫によって改めて萬福寺に納められたという。模写とはいえ、本図は数少ない能登畠山氏一族の肖像画として極めて貴重。

テーマ2

「能登畠山氏と長谷川等伯」

当地出身で桃山時代に大活躍した絵師・長谷川等伯（1539～1610）。実は彼が絵師として大成しえた要因として、「能登畠山文化」の恩恵を享受できたことがかねてより指摘されている。

等伯が能登国七尾に誕生したのは天文8年（1539）のこと。生家は能登畠山氏もしくはその重臣・長氏の家臣であった奥村家。その後七尾城下町で染物と絵仏師を家業としていた、長谷川家の養子となった。等伯は当初「信春」を名のり、養父で絵仏師の宗清（道浄）を師として絵師としての人生をスタートさせたと伝わる。

その等伯が幼少期をすごした時期が、第七代義総の治世下であった。つまりちょうど能登畠山氏の全盛期にあたり、まさに七尾城下町が文化都市として繁栄を極めていた時だ。多感な少年時代、等伯がその「豊かな文化的土壌」から多くを吸収できたであろうことは想像に難くない。

なお現時点では、等伯と能登畠山氏の直接的な関係は詳らかでない。ただし等伯26歳制作の「十二天図」（羽咋市・正覚院蔵）が、第九代当主義綱が差配した気多神社（羽咋市）造営事業の一環として描かれた可能性が指摘されている。また30歳制作の「法華経本尊曼荼羅図」（京都市・妙傳寺蔵）内に描かれた「悳祐」という人物が、第八代当主義続とする説（義続の法名は悳祐）もあるのだ。これらは両者のつながりを想起させる事例といえよう。

また等伯の第一級史料である『等伯画説』（京都市・本法寺蔵）には、彼が「能州の屋形（能登畠山氏）が黙庵筆の『猿猴図』を所持していた」と述べた旨の記載がある。おそらく等伯は、能登畠山氏が所有する同図を実見したのだろう。すると本件も、能登畠山氏と等伯とのつながりを示唆させる一事と考えられようか。

「仏涅槃図」長谷川宗清（道浄）　室町時代（16世紀）　穴水町・来迎寺蔵

長谷川宗清は長谷川信春（等伯）の養父で、染色業を営みつつ絵仏師としても活躍していた。本図は仏教の開祖・釈尊が入滅した場面を表す「仏涅槃図」の1点。仏教の代表的主題であり、等伯ら長谷川派の絵師たちもしばしば描いていた。長谷川派の絵師にとって基本となったのは、等伯の養祖父とも考えられている無分（生没年不詳）筆の「仏涅槃図」（七尾市・長壽寺蔵）で、本図もそれに倣った構図となっている。

なお、本図を所蔵する来迎寺は、祈願所として能登畠山氏の重臣・長氏の外護を受けた寺院である。能登地区にある長氏ゆかりの寺院には長谷川派による仏画が多く伝来しており、そのかかわりが注目される。

「日蓮聖人坐像」長谷川信春（等伯）彩色　永禄7年（1564）　七尾市・本延寺蔵

日蓮宗の開祖・日蓮聖人（1222～82）の木像で、左手に『法華経』を握り、右手に笏を執る姿を表している。檜材による寄木造で、全体に彩色を施し、像内は内刳りとする。像内には銘があり、山本孫八郎清久という人物が願主となり、永禄7年に開眼供養が行われたことが記される。この山本孫八郎清久は、長氏の家臣に山本氏がいることから、その一族かもしれない。

また銘文からは、像に彩色寄進をしたのが若き等伯であることもわかる。なお江戸～明治時代に上塗りされ、等伯の彩色はほとんどわからなくなっていたが、近年実施された修復により当初の彩色がある程度確認できるようになった。

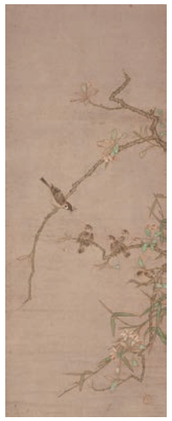
「愛宕権現図」長谷川信春（等伯）　室町時代（16世紀）　当館蔵

京都・愛宕山朝日峰に鎮座する愛宕権現は、蓮華三昧経に説かれ、火伏せの神として祀られた。本地仏は勝軍地蔵で、鎌倉時代以降人びとの信仰を集め、特に武将の信仰が盛んであった。

本図は火焔を背にして甲冑を身に着け、右手に2本の戟を持して左手に如意宝珠を載せ、正面を向いた葦毛の馬に騎乗するという勇ましい姿で描かれている。画面右下に「信春」袋形印が捺されており、手などの表現から30歳代前半頃の制作と考えられる。

なお当時七尾に愛宕神社が存在したことがわかっており、等伯26歳筆の「十二天図」（羽咋市・正覚院蔵）との共通性からも、等伯能登時代の制作ではないかという。

「海棠に雀図」長谷川信春（等伯）　室町時代（16世紀）　個人蔵



本図は左方に向かって枝を伸ばし、薄紅色の花を咲かせる海棠と笹、口に虫をくわえ、下に向かって長く垂れ下がる枝に止まる雀と、その右斜め下の枝に止まる4匹の雀を描く。どうやら親雀が子雀たちに餌を与えようとしているようだ。羽根の文様や質感の表現は見事で、子雀たちは大きさや色の調子、顔の表現も微妙に変えている。

画面右下方には「信春」袋形印が捺され、同じく「信春」袋形印を持つ「恵比須大黒・花鳥図」（京都国立博物館蔵）の中の1幅「萱草に小禽図」と同じく、南宋院体画への学習姿勢が見て取れる。

いしかわ百万石文化祭2023開催記念特別展示（10/12～10/29）

「西湖図」狩野元信筆　室町時代（15～16世紀）　石川県立美術館蔵
「沢庵和尚像自画賛」沢庵宗彭筆　寛永6～9年（1629～32）　石川県立美術館蔵

この絵画2点は能登畠山氏の末裔で金沢市出身の畠山一清氏（1881～1971）が、昭和34年（1959）に石川県美術館（現・石川県立美術館）の開館を記念して寄附した作品。氏はポンプで有名な荏原製作所の創業者である一方、「即翁」の号を持つ近代を代表する数寄者としても知られる。

一清氏は日本の伝統文化、ことに茶道と能楽に極めて造詣が深く、日本・東洋の古美術品を数多く収集した。その優れたコレクションは現在、氏が設立した畠山記念館（東京都）に所蔵され広く一般に公開されている。本図は能登畠山氏と深いかかわりがある氏の元収集品であることから、今回「いしかわ百万石文化祭2023」開催記念として特別に展示させていただいた。

「沢庵和尚像自画賛」
石川県立美術館蔵

出品目録

［第1展示室］

	作品名	種類	員数	作者など	制作年代	所蔵
1．	能州七尾畠山之城図	絵画	1枚		年未詳	金沢市立玉川図書館
2．	楊柳観音像	絵画	1幅		室町時代（14～16世紀頃）	七尾市・悦叟寺
3．△	熊木左近将監画像	絵画	1幅	伝長谷川信春（等伯）	室町時代（16世紀）	七尾市・定林寺
4．△	畠山義親画像	絵画	1幅		延宝８年（1680）	能登町・萬福寺
5．○	前田利家画像	絵画	1幅		桃山～江戸時代（17世紀）	七尾市・長齢寺
6．△	前田安勝画像	絵画	1幅		桃山時代（16世紀）	七尾市・長齢寺
7．○△	長　好連画像	絵画	1幅		桃山時代（17世紀）	七尾市・悦叟寺
8．	石動山古絵図（複製）	絵画	1幅	玉井敬泉模写	原本室町時代（16世紀）	中能登町・石動山区
9．□	黒韋肩紅白糸威腹巻 古制背板付 長家伝来	工芸	1領		室町時代（14世紀）	石川県立歴史博物館
10．	脇指　銘能州笠師／国長作	工芸	1口	能州笠師国長	南北朝～室町時代（14世紀）	個人
11．	丸に二引紋刀掛け	工芸	1点		年未詳	七尾市
12．△	山王二十一社神楽鈴	工芸	1点	蓬莱國近	永正13年（1516）	七尾市・大地主神社
13．	丸に二引紋散蓬莱紋角赤手箱	工芸	1合	伝松波畠山家伝来	江戸時代（18～19世紀）	七尾市
14．□	畠山義統書下	典籍	1冊	『中興雑記』所収	原本文明10年（1478）	羽咋市・永光寺
15．□	畠山義元書下	書跡	1通		明応８年（1499）	羽咋市・気多大社
16．△	畠山義元書下	書跡	1通		永正12年（1515）	七尾市・龍門寺
17．△	畠山義元書下	書跡	1通		永正12年（1515）	七尾市・龍門寺
18．△	畠山義総奉書	書跡	1通		永正12年（1515）	七尾市・龍門寺
19．△	畠山義総禁制	書跡	1通		永正13年（1516）	七尾市・龍門寺
20．△	能登畠山氏奉行人連署書状	書跡	1通		（永正13年）	七尾市・龍門寺
21．△	畠山義綱寄進状	書跡	1通		弘治３年（1557）	七尾市・龍門寺
22．△	畠山義綱書状	書跡	1通		弘治３年（1557）	穴水町歴史民俗資料館
23．◎	気多大神宮遷営棟札	書跡	1枚		永禄５年（1562）	羽咋市・気多大社
24．□	気多社檀那衆交名	書跡	1通		天正元年（1573）	羽咋市・気多大社
25．	上杉謙信書状	書跡	1通		天正６年（1578）	石川県立歴史博物館
26．△	徳田秀章等田地寄進状	書跡	1通		天正７年（1579）	七尾市・龍門寺
27．□	織田信長朱印状	書跡	1通		天正８年（1580）	個人
28．△	前田利家黒印状	書跡	1通		天正13年（1585）	七尾市・龍門寺
29．□	永光寺年代記	典籍	1冊		室町時代（15～16世紀）	羽咋市・永光寺
30．□	正法眼蔵、伝光録・正法眼蔵仏祖悟則　附納入箱	典籍	1具		室町時代（16世紀）	七尾市・龍門寺
31．□	畠山義綱長続連御亭御成記	典籍	1冊	『長家文書雑記』所収	原本永禄４年（1561）	個人
32．	翁物がたり	典籍	1冊		江戸時代（19世紀）	七尾市・大地主神社
33．	名物茶器目録	典籍	1冊	『松雲公採集遺編類纂』所収	原本室町時代（16世紀）頃	金沢市立玉川図書館
34．△	御朱采配	資料	1握	伝長続連使用	室町時代（16世紀）	穴水町・長谷部神社
35．	陣太鼓	資料	1面		伝室町時代（16世紀）	羽咋市・永光寺

［第2展示室］

作品名	種類	員数	作者など	制作年代	所蔵
36. △日蓮聖人画像	絵画	1幅	長谷川宗清（道浄）	天文23年（1554）	輪島市・成隆寺
37. △仏涅槃図	絵画	1幅	長谷川宗清（道浄）	室町時代（16世紀）	穴水町・来迎寺
38. 鬼子母神十羅刹女像	絵画	1幅	長谷川信春（等伯）	室町時代（16世紀）	氷見市・蓮乗寺
39. △日蓮聖人画像	絵画	1幅	長谷川信春（等伯）	永禄８年（1565）	七尾市・實相寺
40. □仏涅槃図	絵画	1幅	長谷川信春（等伯）	永禄11年（1568）	羽咋市・妙成寺
41. □善女龍王図	絵画	1幅	長谷川信春（等伯）	室町時代（16世紀）	当館
42. □愛宕権現図	絵画	1幅	長谷川信春（等伯）	室町時代（16世紀）	当館
43. 海棠に雀図	絵画	1幅	長谷川信春（等伯）	室町時代（16世紀）	個人
44. 畠山義総画像（複製）	絵画	1幅		原本室町時代（16世紀）	石川県立歴史博物館
45. 第三代畠山義統邸での歌会の想像図	絵画	1幅	山下岳堂	昭和41年（1966）	七尾市
46. △日蓮聖人坐像	彫刻	1躯	長谷川信春（等伯）彩色	永禄７年（1564）	七尾市・本延寺
47. △畠山義総書状（山科家宛）	書跡	1幅		享禄３年（1530）	七尾市
48. △畠山義総書状（冷泉家宛）	書跡	1幅		室町時代（16世紀）	七尾市
49. □畠山義総書状	書跡	1通		天文２年（1533）	石川県立歴史博物館
50. □畠山義総書状	書跡	1通		天文２年（1533）	石川県立歴史博物館
51. □畠山義総書状	書跡	1通		年未詳８月	石川県立歴史博物館
52. □畠山義総書状	書跡	1通		年未詳12月	石川県立歴史博物館
53. □畠山悳胤書状	書跡	1通		（天文５年）	石川県立歴史博物館
54. □畠山悳胤書状	書跡	1通		天文６年（1537）	石川県立歴史博物館
55. □畠山悳胤書状	書跡	1通		天文６年（1537）	石川県立歴史博物館
56. □畠山悳胤書状	書跡	1通		天文６年（1537）	石川県立歴史博物館
57. □畠山悳胤書状	書跡	1通		天文６年（1537）	石川県立歴史博物館
58. □賦何船連歌	典籍	1巻		文明15年（1483）	七尾市
59. 賦何路連歌	典籍	1巻		大永３年（1523）	東京都・明治大学図書館
60. □賦何人連歌	典籍	1巻		大永５年（1525）	個人
61. △天目茶碗	資料	1口	大念寺屋敷出土遺物	室町時代（15～16世紀）	個人
62. △水晶製五輪塔形舎利容器	資料	1合	大念寺屋敷出土遺物	室町時代（16世紀）	個人
63. 銅板線刻清涼寺式釈迦如来立像	資料	1点		鎌倉～室町時代（13～16世紀）	七尾市
64. 鋳造　懸仏	資料	2点		室町時代（16世紀）	七尾市
65. 七尾城下出土遺物	資料	11点		室町～江戸時代（16～17世紀）	石川県埋蔵文化財センター

【いしかわ百万石文化祭2023開催記念特別展示】（10/12～10/29）

作品名	種類	員数	作者	制作年代	所蔵
66. 西湖図	絵画	1幅	狩野元信	室町時代（15～16世紀）	石川県立美術館
67. 〇□沢庵和尚像自画賛	絵画	1幅	沢庵宗彭	寛永６～９年(1629～32)	石川県立美術館

【参考展示】

作品名	種類	員数	作者	制作年代	所蔵
68. 複製松林図屏風	絵画	6曲1双	原本長谷川等伯	平成22年（2010）	当館（原本東京国立博物館蔵）

※◎…国指定重要文化財、〇…重要美術品、□…石川県指定有形文化財、△…市町村指定有形文化財
※出品作品・資料は変更の可能性があります。また目録順番と実際の展示順番は異なります。
※作品40は会期中前期（9/23～10/11）、作品66、67は後期（10/12～10/29）に展示。

本展覧会を開催するにあたり、貴重な作品のご出品をはじめ種々ご協力を賜りました下記の皆さまに対し、心より御礼申し上げます。
（敬称略・五十音順）

【機関】

穴水町教育委員会
石川県立美術館
金沢市立玉川図書館近世史料館
成隆寺（輪島市）
中能登町教育委員会
羽咋市歴史民俗資料館
萬福寺（鳳珠郡能登町）
来迎寺（鳳珠郡穴水町）
穴水町歴史民俗資料館
石川県立歴史博物館
株式会社スギヨ（七尾市）
定林寺（七尾市）
中能登町石動山区
長谷部神社（鳳珠郡穴水町）
妙成寺（羽咋市）
龍門寺（七尾市）
石川県文化財保存修復協会
悦叟寺（七尾市）
気多大社（羽咋市）
石動山資料館（鹿島郡中能登町）
七尾市教育委員会
本延寺（七尾市）
明治大学図書館（東京都）
蓮乗寺（富山県氷見市）
石川県埋蔵文化財センター
大地主神社（七尾市）
實相寺（七尾市）
長齢寺（七尾市）
七尾城史資料館
能登町教育委員会
永光寺（羽咋市）

【個人】

小浦宗五郎
島田尚紀
永田房雄
松本秀春
若狭清敏
岡本伊佐夫
志村蓮華
野田主利
道下勝太
和田さくら
大森教生
杉野哲也
野村将之
宮下和幸
和田　学
岡崎道子
立原秀明
濵高英登
村瀬博春
梶　青華
長　忠連
林　亮太
本岡三千郎
北林雅康
東四柳史明
安来賢吉・久恵
齋藤彩加
寺口　学
寺川和子
牧山直樹
山田純子